

研究班番号【 14 】
幼少期の習い事と現在の能力の関係

保健班:河崎 優大、橋本 侑樹、平田 結楓、高島 菜摘

Abstract

The purpose of this study is to examine the effects of early childhood learning experiences on current noncognitive abilities. The questionnaire-based experiment revealed that those who had learned more lessons and those who began learning earlier in life tended to score higher on tests measuring non cognitive ability. In a follow-up experiment, we also created a test to score the learning experience based on previous research and the first experiment, and examined which types of non-cognitive abilities tended to be higher in those who scored higher on the test. The results showed no significant relationship.

要約

本研究の目的は幼児期における習い事体験による現在の非認知能力への影響を明らかにすることである。アンケートによる調査により習い事をしていた数が多い人、早い時期に始めた人は非認知能力を測るテストで高得点をとる傾向にあった。また、追実験で先行研究や1回目の調査を参考に、習い事体験を点数化するテストを作成し、そのテストで高得点だった人はどのような種類の非認知能力が高い傾向にあるのか分析した。結果は大きな関係性は見られなかった。

1. はじめに

先行研究より、中学時代の部活動等への積極的な参加の有無、高校時代の遅刻数はその後の雇用形態や賃金に影響を与えることが判明した。また、昨年のLC保健班の研究から幼少期の習い事の数は現在の成績に関係すると判明した。これらより、幼少期の習い事の内容と現在の能力にどのような関係があるか疑問を抱いた。本研究では、アンケートを用いて幼少期の習い事の内容と現在の非認知能力の関係性を明らかにする。

2. 研究手法

高津高校の生徒280名を対象にアンケートを実施した。非認知能力を測る質問については、参考文献を引用し、アンケートを作成した。

《実験1》

①非認知能力についてを測る質問(4:よく当てはまる、3:当てはまる、2:あまり当てはまらない、1:当てはまらないの4段階で答える。)

- ・私は努力家だ。
- ・重要な課題を克服するために、挫折を乗り越えたことがある。
- ・一度始めたことは、必ずやり遂げる
- ・目標を設定しても、すぐ別の目標に乗り換えることが多い。
- ・達成まで数カ月もかかることに、ずっと集中して取り組むことがなかなかできない。
- ・アイデアやテーマに夢中になっても、すぐ興味を失ってしまうことがある。
- ・悪いクセをやめられない。
- ・場にそぐわないことを言うてしまう。
- ・自分にとってよくないことでも、楽しければやってしまう。
- ・集中力がない。
- ・まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できる。

- ・こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できる。
- ・相手から非難されたときにも、それをうまく片付けられる。
- ・他人と話していてもあまり会話が途切れないほうだ。
- ・他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができる。
- ・相手が怒っているときに、うまくなだめることができる。
- ・相手が話しているところに、気軽に参加できる。
- ・初対面の人に、自己紹介が上手にできる。
- ・何か失敗したとき、すぐに謝ることができる。
- ・まわりの人たちが自分と違った考えを持っていても、うまくやっていける。
- ・仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じない方だ。

②経験した習い事についての内容を問う質問

- ・習い事をいくつかしたことがありますか(1年以上続けたもの、小学校を卒業するまでに始めたもの)。
- ・どれくらいの頻度で取り組んでいましたか(家での練習も含む)。
- ・何をしていましたか。
- ・習ったきっかけは何ですか。
- ・何歳から習っていましたか。
- ・何年間続けましたか。

《実験2》

習い事についての質問を実験1の結果をもとにアンケートを再度作成し、種類別の非認知能力との関連を調査した。習い事に関する質問については、参考文献や実験1の結果を根拠に習い事に関する質問の回答を点数化した。習い事の数、していた頻度、続けた年数については、数字が大きいほど、習い事を始めた年齢は小さいほど高得点とした。詳細は以下の通りである。

	5点	4点	3点	2点	1点
数	—	3つ以上	2つ	1つ	0
頻度	毎日	週4～6回	週2～3回	週1回	月1～2回
続けた年数	15年以上	10～14年	6～9年	3～5年	1～2年
始めた年齢	—	0～2歳	3～5歳	6～8歳	9歳以降

①やり抜く力に関する非認知能力についてを測る質問(4:よく当てはまる、3:当てはまる、2:あまり当てはまらない、1:当てはまらないの4段階で答える。)

- ・私は努力家だ。
- ・重要な課題を克服するために、挫折を乗り越えたことがある。
- ・一度始めたことは、必ずやり遂げる
- ・目標を設定しても、すぐ別の目標に乗り換えることが多い。
- ・達成まで数カ月もかかることに、ずっと集中して取り組むことがなかなかできない。
- ・アイデアやテーマに夢中になっても、すぐ興味を失ってしまうことがある。

②セルフコントロールに関する非認知能力について測る質問(4:よく当てはまる、3:当てはまる、2:あまり当てはまらない、1:当てはまらないの4段階で答える。)

- ・悪いクセをやめられない。
- ・場にそぐわないことを言うてしまう。
- ・自分にとってよくないことでも、楽しければやってしまう。
- ・集中力がない。

③社会的スキルに関する非認知能力について測る質問(4:よく当てはまる、3:当てはまる、2:あ

ま

り当てはまらない、1:当てはまらないの4段階で答える。)

- ・まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できる。
- ・こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できる。
- ・相手から非難されたときにも、それをうまく片付けられる。
- ・他人と話していてもあまり会話が途切れないほうだ。
- ・他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができる。
- ・相手が怒っているときに、うまくなだめることができる。
- ・相手が話しているところに、気軽に参加できる。
- ・初対面の人に、自己紹介が上手にできる。
- ・何か失敗したとき、すぐに謝ることができる。
- ・まわりの人たちが自分と違った考えを持っていても、うまくやっていける。
- ・仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じない方だ。

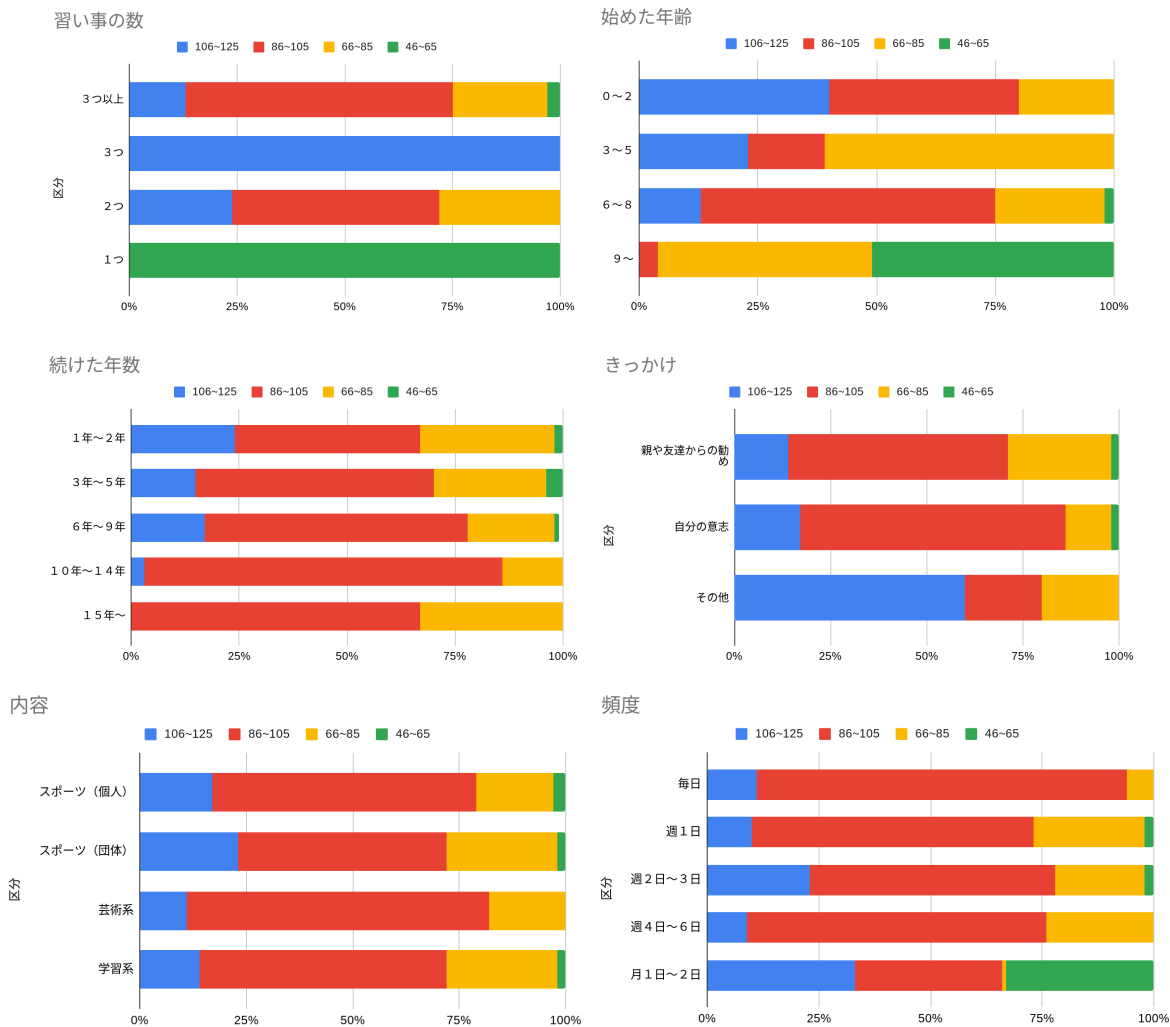
④経験した習い事について問う質問

- ・習い事をいくつしたことがありますか(1年以上続けたもの、小学校を卒業するまでに始めたもの)。
- ・どれくらいの頻度で取り組んでいましたか。(家での練習も含む。)
- ・何をしていましたか。
- ・何歳から習っていましたか。
- ・何年間続けましたか。

3. 結果

《実験1》

習い事を始めたきっかけ、取り組んでいた頻度、続けた年数は非認知能力との相関が見られなかった。一方で、経験した習い事の数、始めた年齢は非認知能力との相関が見られ、経験した習い事の数が多いほど、また始めた年齢が小さいほど非認知能力が高くなった。



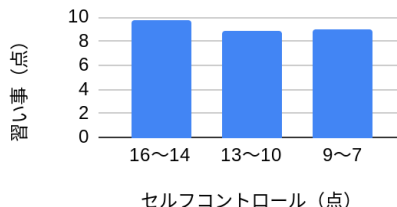
《実験2》

どの種類の非認知能力も、習い事の点数が高い人ほど非認知能力が高いという緩やかな相関が見られるか、習い事の点数と非認知能力の高さの関連は見られないという結果になった。

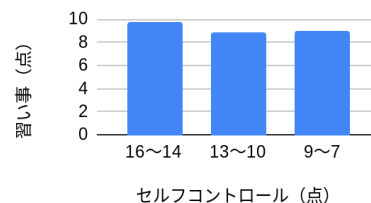
習い事とやり抜く力の関係



習い事とセルフコントロールの関係



習い事とセルフコントロールの関係



4. 考察

実験1より、幼少期の習い事体験は将来の非認知能力を高くすると考えた。実験2より、幼少期の習い事体験と将来高くなる非認知能力の種類は関係しないと考えた。また、その理由は、どのような習い事でも目標達成のための努力や練習の継続、他者との競争など非認知能力を育む要素が共通しているからだと考えた。さらに、家庭環境や個人の能力の差も影響すると考えた。本研究では親との関わり方や個人の性格、特性など、家庭や個人に関する質問をしなかったため、詳しい関連性が見られなかったと推測された。

5. 結論

幼少期の習い事体験は、高い非認知能力を得られる傾向にあることがわかったが、どのような取り組み方をするかや外的要因などによって非認知能力の育まれかたが異なると考えられた。このことから、幼少期の習い事体験は、将来の非認知能力に影響をもたらすが、どのような非認知能力を育むかは明らかにならなかった。そのため、どういった状況下におかれて習い事を行うかによってどのような非認知能力が培われるのか今後調べていく必要がある。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

戸田淳仁、鶴光太郎、久米功一。“幼少期の家庭環境、非認知能力が学歴、雇用形態、賃金に与える影響。” 経済産業研究所、RIETI Discussion Paper Series (2014).

<https://www.rieti.go.jp/jp/publications/dp/14j019.pdf>(参照 2025-02-05)

奥村咲、池田琴恵、(2020). 大学生の非認知能力と関連する幼少期の体験の検討. 東京福祉大学・大学院紀要、10(1-2)、155-165.

<https://www.rieti.go.jp/jp/publications/dp/14j019.pdf>(参照 2025-02-05)